

プロローグ

# 「美しい暮らしを求めて」

小池一子先生

クリエイティブ・ディレクター、武蔵野美術大学名誉教授、  
花王芸術・科学財団美術分野選考委員



## 白いタオル

ご紹介いただきました小池です。1950年頃、私があこがれていたものがありました。真っ白のタオルです。戦争の時代がようやく終わり、日本に平和の兆しが見えた頃、生活のディテールは決してよくなく、わが家では少し茶色くなった手ぬぐいを大事に使っていました。

それから十数年が経ち、私は駆け出しの編集者となり、美容の取材に出かけました。「シャンプーが、ヘアにとって何より大事」というページで、取材先はカットの名手といわれた名和好子先生の美容室でした。温水のシステムもよいとはいえない時代に、「シャンプーは、頭皮をしっかりとマッサージして洗う」という美容の基礎を示してくださったんです。そして、何よりうれしかったのは、一枚の白いタオルで頭をぬぐえば、そのまま自然に乾かすだけでもかっこいいという単純なことでした。

白いタオルは、私にとって豊かな生活のシンボルとなり、欧米のスタンダードで大きなバスタオル、ハンドタオルなど、さまざまなサイズがあることを知り、それを全部そろえることに夢中になりました。

あるフランス映画で、戸棚の上から下まで、真っ白なタオルが整然と並んでいるのを見て、感激いたしました。それから、マリリン・モンローが大きなバスタオルで胸から腰回りまでを包んでいる画像。その時、「セクシーって、こういうことかな?」と思ったことを覚えています。

それから半世紀以上が経ち、白いタオルは私にとっていまだに必需品ですが、ここ数年は大型のバスタオルより、打ち込みのしっかりした30cm四方のオーガニックコットンのハンドタオルを使っています。大きなタオルは、洗たくの際に電気エネルギーをたくさん使いますからね。ハンドタオルでも、女性の体ならかなりふきとれるものだということがわかり、本当にこれ一枚で十分だと思えるようになりました。

オーガニックコットンは、強い農薬などを排除していますから、栽培する人たちの健康

にいい。これがフェアトレードにつながります。農薬を使わない条件で生まれるコットンを、フェア(対等)な取引の輸出入で私たちの生活に取り入れる。このような方向が、これから私たちのライフスタイルの一つの基本ではないかと思います。

白い大きなタオルは、戦後から経済成長期を通過した時代の象徴かもしれません。「足るを知る」という昔からの言葉が、いまとても切実に感じられます。「未来につなぐライフスタイル」を表題とした今回のシンポジウムでは、私たちがめざしている生活イメージとはどのようなものか、それを未来にどうつなげていくのか、ということが語られることになります。

東北大学大学院教授の石田秀輝先生は、いまの地球環境を持続させるにはどうしたらいいかについて、切実な問題を含んだお話をしてくださいと思います。美術作家のやなぎみわ先生には、彼女を突き動かしている文化・芸術の力についてお話しいただきます。

私は、「過去からつなぐすてきな日本」というプレゼンテーションをしたいと思います。日本人がどのように暮らしてきたか、それをいかにクリエイティブに表現したかということをテーマにします。

## ニッポンのデザイン、伝統と現代

画像は、アートディレクターの田中一光さんと共に、社会主義時代の最後の頃のソビエト・ロシアへ持っていました展覧会のイメージカタログからとっています。この展覧会は、「ニッポンのデザイン、伝統と現代」という主題で、情報が封じられていた時代のモスクワの人たちに日本の文化と生活を知ってもらうことが目的でした。

北限は寒帯、南限は亜熱帯に位置する日本列島は、季節の変化に富み、自然に恵まれた環境です。桜前線といって、桜の開花時期がニュースになることは、日本ならではの現象

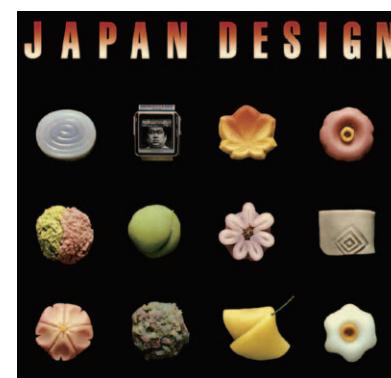


図1

といいましょうか。とてもすてきなことだと思います。

日本人は、衣食住においても、季節の自然を形で表現してきました。それは古くからめんめんと続き、現代の創作もその系譜にあると思います。

イメージカタログの表紙(図1)は、お菓子の中に80年代に流行ったテレビウォッチを入れています。日本人は季節の変化に敏感で、お菓子に表現された春、そして「時間」を感じているということを示しています。

満開の桜の画像は、京都・円山公園です(図2)。茶壺は、江戸時代前期の陶工の仁清(にんせい)の作品で、吉野山ですが、自然界がクラフトに乗り移っています。毛利家伝来の能衣装と江戸時代後期の打ち掛けのデザイン。京都の舞子さんの花かんざしと現代のアクセサリーのクリエイション。お弁当は、コンパクトな中にどれだけの楽しみを盛り込めるかという、日本独特のすばらしい文化だと思います(図3)。



図2



図3

続いて、漆。クラフト。川上元美さんというデザイナーの家具。家具をつくる江戸時代後期からの道具。柳宗理さんが合板でつくられたバタフライスツール。これは京都の町家ですが、こういう町でも現代のファッショ�이나는이라는 것은, 모스크와の人たちには驚きだったようです。

御所人形の這子(はいこ)と、現代作家の栗辻早重(あわつじさなえ)さんのユーモラスなコーラス人形。広告でどうやって人に知らせるかを努力してきた私たち。こちらは、公家も武家も遊びほうける江戸時代前期の作品です。

ここで夏になります。北山崎の海岸の波と岩を左に置いていますが、この夏の印象が、千家十職の中村宗哲(そうてつ)さんの作品。ナツメの小さな入れ物に収まる自然で、18世紀くらいのものです(図4)。白い絹のテキスタイル。提げ重(さげじゅう)。麻に染めの美しいのれん。すだれ、花かご。どれも竹を存分に楽しんで使っています。

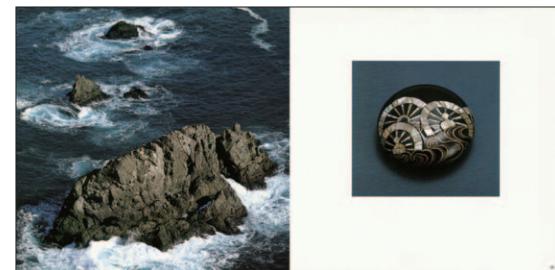


図4

夏の風物詩といえばおそうめんですが、ここで対比して見せたのは、現代の椅子の傑作の一つ倉俣史朗(くらまたしろう)さんのガラスの椅子です。食べ物をつくるクラフトに

必要な包丁。セラミックのはさみ。裏千家の露地行燈。喜多俊之さんの照明器具。

着ることの楽しみを演出していますが、一つは江戸時代中期の「かづき」で、着物に袖を通して羽織って頭にかぶる着方の作品です。もう一つは三宅一生さんの80年代半ばのコレクション。白波五人男の歌舞伎衣装と、若者のかぶくスピリット・竹の子族。

日本にはからくり人形の伝統があります。日本人は、立派な動く仕掛けをつくってきました。

「秋の吹き寄せ」は、紅葉した葉や木の実が集められて、これが食事になってしまいます。日本らしいですね。秋の衣装は、日本画家の加山又造さんの作品画像と狂言の肩衣で。お茶。お酒。すべてにつくる人の思いがあって、生活を楽しむために生まれてきました。

楽器では、ヤマハのエレクトーンの初期のものを紹介しています。

これは、ミクロコスモスのような世界を日本人は昔からつくってきたんだなあという、ホンダのモーターバイクのミニチュアの部品です。

江戸時代の絵草紙と、横尾忠則さんのつくった絵草紙。何百年もの間を隔ても、同じように人々の楽しむメディアになっています。



図5

冬の情景です(図5)。右側は雪持竹(ゆきもちだけ)といって、雪が降って積もった竹の風景が、能衣装になります。お正月のすべてにこういうクラフトをつくろうという美術工芸品の世界。水引の極まった作品もあります。

黄八丈。刺し子。南部鉄瓶。おくどさん。初期のシステムキッチン。キッチンユニット。これは、私たちは雪とどう遊んでいますか。



図6

の方たちが着ている自分たちのアイデンティティ(図6)。これが、現代の企業のアイデンティティとして、ロゴやマークになっていますね。

私の時間もそろそろおしまいですが、こうしてご覧いただいたものは、私たちが継承してきた日本の生活と文化の形です。美術工芸品といわれる領域のものと現代のデザイン

がありましたが、ものを作り出す力が、美しい暮らしをつくる原動力ということです。ものをつくり出すことは、いわば文化に形を与える、あるいは文化を現実の表現とすること。私たちは、それを「デザイン」と呼んでいます。

形をつくることは、素材を必要とし、金物だったら金工の仕事、焼き物だったら陶工の仕事、竹を使う竹細工。現在では3Dの制作も巻き込んでいますね。そのようにして今日までやってきましたが、さてこれからはどのように生活し、つくっていきましょうか。

いよいよお二人のお話を聞く時間が来ました。私は一度退場させていただきます。どうもありがとうございました。

<掲載写真出典>

書籍名:『JAPAN DESIGN 日本の四季とデザイン』

構成:田中一光、小池一子

監修:吉田光邦

AD:田中一光

発行:1984年9月／リプロポート

小池一子先生(クリエイティブ・ディレクター)

東京都生まれ。早稲田大学文学部卒業。「無印良品」創業以来アドバイザリー・ボード。武蔵野美術大学名誉教授。1983年～2000年日本初のオルタナティブ・スペース「佐賀町エキジビット・スペース」創設・主宰。現代美術の新しい才能を国内外に送り出した。2000年、ヴェニス・ビエンナーレ第7回国際建築展日本館「少女都市」企画・展示監修。2004～2005年、武蔵野美術大学美術資料図書館、及び鹿児島県霧島アートの森「衣服の領域 On Conceptual Clothing:概念としての衣服」展。2012年、21\_21 DESIGN SIGHT EXHIBITION「田中一光とデザインの前後左右」展ディレクター。2011年～佐賀町アーカイブ(3331 Arts Chiyoda)にて現代美術作家のアーカイブ展ほか企画実施多数。編著書に『三宅一生の発想と展開』(平凡社、1978年)、『空間のアウラ』(白水社、1993年)、『Fashion—多面体としてのファッション』(武蔵野美術大学出版局、2004年)、『田中一光とデザインの前後左右』(FOIL、2012年)など。